

徳 之 島

いん た ぶ
犬田布

唄・三味線：治井 秋喜
相方ハヤシ：治井 春代

詞章 1

* 2 番歌詞のみ

ハレエーイ あだぬゆぬなかに
ながらいてうりば
（ながらいてうりば）
あさゆうやちぬなだ
ハレ しゅでどマタしぶる しぶる
インタブトウバル ナウラムィシャヤー

共通語訳

いやな世の中に、長く生きつづけていれば、朝夕血の涙が染めた、袖を絞るばかりです。

詞章 2

かしゅてきばたんて たんがためどなりゆんが
やまといしゅぎらぬ ためどなりゆり

共通語訳

こんなに働いても、誰のためになるのでしょうか。大和（本土）のいしょぎらのためになるだけです。

※「いしょぎら」は「絹の着物を着た人」を意味し、薩摩藩の侍のこと。

曲目解説

曲名の「犬田布」は今は伊仙町の一集落ですが、薩摩藩支配の時代、藩に抵抗した犬田布騒動で有名なところ。この唄も、それと関連して語られることが多いのですが、実際はこの録音で歌われている「インタブトウバルナウラムィシャヤー」というハヤシコトバから付いたと考えられます。

犬田布騒動の簡単な経緯は次の通りです。薩摩藩が奄美の人々に黒糖を生産させて、藩の財政を潤していたころ、島は大凶作に見舞われた年がありました。その時、上納糖を収められなかった犬田布のさる男性に役所から呼び出しがかかり、砂糖を隠した疑いで、厳しい取り調べを受けました。それを見ていた、犬田布の人たちがその男性をとり返し、斧や鎌や竹槍で戦います。しかし、結局は騒動の首謀者6名は捕えられてしまいました。

ここに歌われた2つの歌詞は、藩に支配された島の人々の苦しみと、奄美に派遣された藩の侍たちを恨む文句になっています。

この系統の曲は、同じ徳之島でも「道節」「二上り節」「はやり節」等といわれ、また奄美大島の南部では「徳之島節」、沖永良部では「犬田布嶺」といわれ、今でも歌われています。哀しみのあるしみじみとした曲です。

歌唱者

治井 秋喜（はるい あきよし）昭和7年生まれ。徳之島町井之川出身。

しまあさばな
島朝花

唄・三味線：中島 清彦
相方ハヤシ：泉 サダ子

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

あさばなにふりて
むとしゅらちもりゅんな
（むとしゅらちもりゅんな）
むとしゅらさきいじ
まさるそうやねんど ねんど

共通語訳

朝花が好きになって、元（本妻）と末（朝花つまり愛人）が混同してしまいました。元より末が先になりましたが、元に勝るものではありません。

※「朝花」は若く、浅はかな女性のこと。

※「元」は本妻。「末」はそうでない人をいい、元と末を混同してはいけないといっています。

詞章 2

うやがなしうかげ かんげがでふでて
うやがなしくとや そそんぐわどうめんな

共通語訳

親がなし（尊称）のお蔭で、こんなにまで大きくなって、
親がなしのことを、粗末に思っではいけません。

詞章 3

てんぬぶりぶしや ゆでかゆまれゆい
うやぬゆしぐとや さんぐわむさりゆめ

共通語訳

天の群星は、数えれば数えられますが、親の教えは、計算
（数え）ができません。

※「ゆで」というのは「読んで」ということですが、こ
こでは数えるという意味になります。

詞章 4

はるぬくぶくぶや あめふりばたまる
あめふらんでしゅて たまるくぬやしき

共通語訳

原っぱの窪みは、雨が降れば溜まります。雨が降らなくとも溜まるのが、ここのお屋敷です。

※屋敷に溜まるのは、お金や財産のことで、家に祝福を
与える歌詞。

詞章 5

きゅうぬふくらしゃや いちよりむまさる
 いつもきゅうぬぐとに あらちたぼり

共通語訳

今日の誇らしさ（嬉しさ）は、いつもよりも勝ります。いつも今日のように、あってください。

曲目解説

「朝花」は奄美大島、喜界島、徳之島で歌われていますが、曲調は島により、また地域によってずい分違いがあります。「島朝花」の「島」には「徳之島風の」というのと「自分の集落の」という2つの意味が含まれているかもしれません。

曲名の「朝花」は朝咲く花のような若い娘さんという意味ですが、徳之島には「朝花」で始まる唄の文句がいく首か伝えられています。

奄美大島、喜界島には、短い「朝花」と、歌詞の繰り返しをしながら歌う「長朝花」の2種類がありますが、徳之島は1種類の短い「朝花」だけです。ただし、歌われる歌詞は、琉歌調といわれる8886調と、音律が定まらない自由形があります。

「朝花」の本家が、奄美大島、喜界島、徳之島のどこであるかは、よく分かっていません。ただ、唄というものは、いつどこに飛び火するか分からないもので、沖縄では八重山地方に「朝花節」が伝わっています。これが奄美の唄であることも意識されています。

ついでながら、奄美大島の唄者が、徳之島の「朝花」に挑戦して、「やっぱり徳之島の人でなければ（徳之島の「朝花」の）味が出せない」といった人もいます。島唄とは、そのようなものかもしれません。

歌唱者

中島 清彦（なかしま きよひこ）昭和27年生まれ。天城町岡前出身。

ちく みい
作たの米

唄・三味線：徳久 寿清

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

くとしちくたぬみや ハレ
ししとたまぬなりしゅんでー
ヤラチャンド チクタヌミー

共通語訳

今年作った稲の実は、しっかりとした玉になったよ。

※ 1 番のみ 2 句体歌詞で、ほかは 4 句体です。

詞章 2

にしぬかでぬふきば まはいぬあぶしまくら
はいぬかでぬふきば にしぬあぶしまくら

共通語訳

北の風が吹けば、真南の畦（あぜ）が稲の枕になり、南風が吹けば、北の畦が枕になります。

※ 「にし」は奄美方言では、多くが北をさします。

※ 「あぶしまくら」とは、畦が稲穂の枕になる様をいい、

豊作を意味します。

詞章 3

くとしゆぬかわて にぐわちゆきふらち
くとしいねがなしや ゆきぬまぐみ

共通語訳

今年世の中が変わって、2月に雪が降りました。今年の稲がなし（尊称）は、雪のような真米です。

※雪と米の豊作を結びつけるのは、全国的な風習です。

詞章 4

くとしはちぐわちや ゆみどりぬうゆえ
やねぬはちぐわちや くわなちうゆえばかり

共通語訳

今年の8月は、嫁取りのお祝い。来年の8月は、子ども誕生のお祝いです。

曲目解説

この曲名は、1番の歌詞の中にも、またハヤシコトバの中にも出ています。「作った米」というそのものずばりの意味です。

なお、この唄を伝えてきた井之川集落では、つい近年まで唄遊びのなかの踊り唄として盛んに歌われていました。この唄はもともと豊作を願う儀礼的な唄であった可能性があります。歌われる歌詞をみてみますと、そのことが

よく分かります。

ところで、この唄は1番だけ、8886調4句からなる歌詞の2句のみ、すなわち上の句部分だけ歌われていることに気づきます。2番以降、8886調4句体歌詞が歌われているわけです。

実は、「作たの米」という唄は、沖縄の首里王府で育まれた古典音楽の中にもあるのですが、それも上の句だけの唄として記録されているのです。このことがなぜ問題なのかといいますと、奄美、沖縄で8886調4句体歌詞が盛んになる前、きっと88調2句体の時代があったに違いない、という説を補強することになるからです。

最後にこの唄、踊りは、井之川では「畦越（あぶしく）えの水」「稲摺り節」とセットになっていて、3曲続けて踊られることが普通だったようです。3曲とも稲作に関係ある唄であることが、曲名からも分かります。

歌唱者

徳久 寿清（とくひさ じゅきよ）大正3年生まれ。徳之島町井之川出身。

ちょうきく

唄・相方ハヤシ：米田 祐啓
唄・相方ハヤシ・三味線：泉 憲秀

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ハーレ ちょうきくよハレ
 ならりゆんどなららんど
 ちょうきくよハレ
 ならりゆんどなららんど
 ちょうきくよ
 (ハーレ ならりゆんどなららんど ちょうきくよ)
 ハーレ わんなりならんでヨハレ
 うやんきゃぬなさむんぬ
 わんなりならんでヨーハーレ
 うやんきゃぬなさむんぬ
 わんなりならんで

共通語訳

ちょうきく（女性名）よ。結婚できるのかできないのか、
 ちょうきくよ。
 私は結婚できません。親が許さないなので、私は結婚できません。

詞章 2

たいこぬさがて うやしるじょうぐちなんや たいこぬさがて
 うれうちが じょうぐちばれきゅうなおふっしゅ うりう
 ちが

共通語訳

太鼓が下がっています。お社（やしろ 神社）の門口に、
太鼓が下がっています。

それを打つ人。じょうぐちばれ（地名）のきゅうなお大主
（ふっしゅ 尊称）が、それを打つ人です。

詞章 3

のりとぬさがて うやしろじょうぐちなんや のりとぬさ
がて

うれゆみが はんたんばれかないふっしゅ うりゆみが

共通語訳

祝詞（のりと）が下がっています。お社の門口に祝詞が、
下がっています。

それを読む人。はんたんばれ（地名）のかない大主が、そ
れを読む人です。

詞章 4

うふいのさがて うやしろじょうぐちなんや うふいのさ
がて

うれふきが はんたんばれとみときしゅが うれふきが

共通語訳

大きい笛が下がっています。お社の門口に、大きい笛が下
がっています。

それを吹く人。はんたんばれ（地名）のとみとき（男性
名）主（敬称）が、それを吹く人です。

詞章5

しびぬさがて うやしるじょうぐちなんや しびぬさがて
うれふりが とうましばれしきえいしゅや うれふりが

共通語訳

しび（お祓いする神具）が下がっています。お社の門口に、しびが下がっています。

それを振る人。とうましばれ（地名）のしきえい（男性名）主が、それを振る人です。

曲目解説

「ちょうきく」というのは、加計呂麻島に起こった若い男女の心中事件を歌った唄です。この唄は、奄美大島の南部でも盛んに歌われますので、徳之島にも奄美大島から入った唄ではないかと推測されます。

地元では、いろいろな憶測がなされていて、真相は分からないのですが、こんな話があります。心中したのは、「ちょうきく」という娘と「活国」といわれる青年です。唄のなかでは、「ちょうきく女」「かつくにやくめ（兄さん）」といわれていますから、ともに良家の娘、息子と思われれます。なぜ、心中までしなければならなかったのか、これが様々な説に分かれ、一つは、2人は相思相愛の仲であったのに、親たちが許さなかったというもの。もう一つは、ちょうきくが最初から活国のプロポーズに気乗りしなかったというものです。

この録音に歌われている最初の歌詞は、最初の説の通りですが、別の説を思わせる歌詞も残っています。島唄は、今でいえば新聞テレビのように島の情報を伝える役割も持っていましたが、なに分、口伝えですので、長い年月の間にはいろいろな尾ひれが付くことは仕方ないことでした。

徳之島では、「ちょうきく」の曲にのせて、島の出来事やうわさ話を歌い、唄と話を広めました。詞章2以降は伊仙町の面縄高千穂神社のことを歌っています。

歌唱者

米田 祐啓（よねだ すけひろ）昭和13年生まれ。伊仙町面縄出身。

泉 憲秀（いずみ のりびで）昭和15年生まれ。伊仙町面縄出身。

みちぶし
道節

唄・三味線：宝野 秀嗣
相方ハヤシ：泉 サダ子

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ハレイー ゆなかめぬさめて
ねぶららぬときや
（ねぶららぬときや）
うまちどいゆして
アレ ふきゆるマタたばく たばく

共通語訳

夜中目が覚めて、寝られないときは、うまつ（火）を引き寄せて、吸う煙草よ。

詞章 2

たばくちなんくさや にぎゃくさどやしが
うりふきゆるむじょや まさてかなしや

共通語訳

煙草という草は、苦い草ですが、それをくゆらせる愛しい人は、勝って可愛いものです。

※煙草は昔、奄美では「縁付け草」ともいわれていました。

詞章 3

ちんごみじためて やどばしりぬらち
 かながもゆるゆるや やどぬやしく

共通語訳

ちんご水を溜めて、屋戸走り（敷居）を濡らしておきます。かな（愛しい人）が忍んでくる夜は、容易に戸が開くように。

※「ちんご水」とは、芭蕉布の時代、芭蕉糸を縊（よ）るために原料を水につけておいたときの水をいいます。ヌルヌルして、戸の敷居が滑（すべ）りやすくなったといわれます。

詞章 4

ふかだくぬがらや ふしならでたちゆり
 ごろくにんぬきょうでぐあ いんたちさるた

共通語訳

深い谷間に生える竹は、節が並んで立っています。5、6人の兄弟たちが、揃って立っていく（一人前にやっていく）のは難しいことです。

曲目解説

「道節」の「道」は婚礼のときに、花嫁が嫁ぎ先に行く、その時の道行き唄だという人もいます。また、奄美では、旅立つ人を唄を歌いながら港まで送ることもよく行われましたので、それも含まれるかもしれません。この系

統の唄は、「はやり節」「二上り節」「犬田布」「井之のいび加那志」などと名前を変え各地で歌われていますが、現に「井之のいび加那志」には、「井之川のいび神様は、風の親といわれる。あなたを港までは送りますが、あとは南風におまかせしましょう」(共通語訳のみ)という文句が歌われています。

また、これらの唄には、婚礼、旅送り以外にもほかの唄には見られない興味ある役割があったようです。例えば、病人が出ればその人を慰めるために枕もとでこの唄を歌うことがありました。これをとぎうた(伽唄)といいます。実際に、重い病気で寝ていた人が、この唄を聞いて元気がでてきたという話もあります。悲しげな唄で、歌詞も決して病人を元気づける感じはしないのですが、唄には不思議な力があるようです。

なお、これらの唄が、奄美大島南部と沖永良部にも伝わり、奄美大島では「徳之島節」「犬田布節」として、沖永良部では「犬田布嶺」として、昔から我が島にあったかのように親しまれています。

歌唱者

宝野 秀嗣 (ほうの ひでつぐ) 昭和19年生まれ。徳之島町母間出身。